

「馬場小室山遺跡フォーラム」第63回ワークショップ

【実践！パブリック・アーケオロジー2014】

馬場小室山遺跡を形成した「見沼文化」(人類活動と環境変遷)の追及、そして未来への展望

1.【交流・芸術】井出政男個展：「・・・遙かな縄文土器」

- ・案内状より・・・「土器による煮沸実験を行う。土器の水漏れが多いと水が煮沸せずに煮炊きができない。煮沸の可否は採集地の粘土の質によって左右される。縄文人はこの問題をどのようにして解決したのだろうか？」

2.【地域・学習／学際・連携】：秩父と見沼合同＜3・11 陸中・山田湾文化復興祈念＞シンポジウム

【第1部：11／3(月・祝)】「縄文人は何を考え、どう生きたか？ <<第2回>>—土偶、その表現と祈り—」

- ・第1回は「縄文人は何を考え、土器をつくり、使ったのか？」という問題提起に対して、内容が発散しないように「縄文土器の形と用途」に焦点を当てて1万年を考えてみた。器形に大きな変化が認知される場合、それは突然の出来事ではなく、長い時間を経てそこに至る「土器は土器から」の場合と、異なる素材による器、例えば編組製品や木製容器などの模倣現象であったり、更に土器だからできる誇張現象であったりと、土器には縄文社会の匠環境が凝縮されていることが判明した。このようなことを土器以外に敷衍するならば、「縄文時代は植物栽培・管理栽培を含め、多様な環境適応から構成される複合的な生業環境において出現する多彩な匠たちが、集落を超えて影響し合う高度な贈与経済の時代」と考えられる。経済としての物と物との交易は存在せず、文化的かつ社会的に広い範囲で価値が共有される特定の威信財も存在せず、水の流れと同じく高きから低きに向かう物流の時代といえる。
- ・第2回は土器づくりの匠たちから、縄文時代のイデオロギーを代表する土偶に焦点を当てて、「縄文人は土偶に何を表現し、どのような祈りをこめたのか？」と問題提起したい。山内清男の方法により土偶の年代的系統的位相がある程度判明した今こそ、天才・坪井正五郎の「コロボックル思考法」が正しく評価されなければならない。そこで坪井正五郎の方法を仮に「表現の視点：土偶とは何か？」とするならば、山内清男の「土器型式」により分析する「地域の視点：土偶から地域を探る！」も同時に取り上げ、表現の意味に接近したい。美術を専門とする井出政男氏と井山紘文氏にも協力頂きたい。

3.【交流・復興／学際・連携】：秩父と見沼合同＜3・11 陸中・山田湾文化復興祈念＞シンポジウム

【第2部：11／24(月・祝)】「ようこそ、「山田湾まるごとスクール」へ」

- ・NPO 野外調査研究所／馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム／新潟大学災害・復興科学研究所の共催で 2012 年から「山田湾まるごとスクール」を実施している。事務局による山田史談会との交流会と、交流活動をベースとして一般の方々にも参加を呼びかけ、山田町を知って頂く観光考古学「山田湾まるごとスクール」事業を実施している。
- ・3 団体は年度期間が順に 7 月－6 月／1 月－12 月／4 月－3 月と異なるため、ここでは「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」による年度期間に従い、2014 年度を説明する。
2/26－2/28 に川端弘行会長の被災自宅跡を訪ね、考古資料のレスキュー状況をお聞きし、資料を確認し、今後の活用を検討開始。6/26－6/28 は本来川端会長と 8/29－8/31 に予定していた「山田湾まるごとスクール」の企画案検討と協力依頼の打ち合わせであったが、川端会長の不測事態(5/25)によりその対応を山田史談会事務局や大浦仮設住宅部会長と面談・相談・検討。その後、川端会長から 7/21 山田町帰宅との連絡を受け、事務局は 9/2－9/4 にお見舞いを予定。
- ・こうして今年はいくつかの「山田湾まるごとスクール」事業をふり返る絶好の機会でもあり、参加できなかった方々にも山田町の現状や山田湾の素晴らしさを共有できる企画を推進する。

4.【連絡】その他活動連絡・近況・予定など

- ・「さいたま朝日」編集室に「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」の活動紹介(8／8)。10月の最終日曜日の号で11月イベントをPR予定。紹介記事作成に当たっては「さわらび通信」の画像を使用したく。
- ・新潟市文化財センター企画展「緒立遺跡展」で「緒立式」の実態が想像以上に独自の施文であることを実感し、また弥生式前期の「綾杉文様帯」を再認識し、三陸との共通性に思いを馳せた(8／2)。

以 上